

No 194

2023・10・発行

平和
kanagawa
通信

平和運動推進委員会
神奈川県高等学校教職員組合
横浜市西区藤棚町2-197

特集

戦争をしないと誓った国が戦争をする国に

報告：旧海軍連合艦隊司令部「日吉台地下壕」FW

過去の戦争から学び



そのモールス信号は最後にツーッと途切れました。特攻兵として敵地に突撃したのか、あるいは迎撃されたのかはわかりませんが、特攻兵の“最期の声”とも言えるあの信号を聞いた時胸がキュッとなりました。

FWに参加した高校生平和大志の感想より

昨年末に放送されたテレビ番組「徹子の部屋」にゲスト出演したタモリさんが、2023年について問われ「新しい戦前になるんじゃないですかね」と発言したことがネットで話題になっている。

特集記事より



今、日本や世界で
起きていることを見てみると…

私たちは今、何をすべきなのだろうか…

戦争をしないと誓った国が戦争をする国に

日吉地下壕見学に参加した。何回か見学したが、回を重ねるたびに主催の「日吉地下壕保存会」の戦争の継承をどう伝えるかという思いが伝わる。この地下壕で海軍の通信隊は沖縄戦で特攻隊員の最後のモース信号を受信した。今回参加者は暗闇の中で信号音がとどえる音を聞く。案内された方が個人的見解と前置きしこう話された。「頑丈に守られた地下壕で戦況を受信する、その一方で、同じ時に沖縄ではガマで人々は生死をさまよっていた。」と。それを聞いて、本来国民を守るべき国家が国家のために国民を犠牲にするという不条理を思った。

ところで地下壕と言えは今年の6月、宮古島市は地下にシェルターを作る財政支援を国に求め、7月24日には政府が地下シェルターを作る方針を決めた。宮古島市は約4500人が3日間すごせ、備蓄倉庫や発電設備も要求している。「台湾有事」ということで宮古島に自衛隊のミサイルが配備されなかったら、こんな要求はなかったに違いない。戦争が始まったとしよう。全島民が地下シェルターに3日間で助けられるという根拠はない。しかも戦争は無差別の殺し合い、地下シェルターが狙われる可能性はある。シェルターは建設予定の体育館の地下に作るという。シェルターの場所まで公開する国に住民の安全を考えているとは思えない。中国の脅威、台湾有事を名目に宮古島、石垣島、与那国島は軍事基地化され、国防の名の下に住民を戦争に近づけている。先の大戦で日本は沖縄と捨て石にした。同じことを繰り返そうとしている。

戦争に行かない麻生副総理の「戦う覚悟」発言

麻生自民党副総裁が8月8日、台湾での講演で「台湾有事」について「戦う覚悟」という発言が話題になった。「台湾有事」を利用した防衛費倍増の世論を作るそんな思惑をあるのだろう。ロシアのウクライナ侵略が、中国も台湾に武力行使するという危機感が煽られている。「台湾有事」の起こりうる可能性を冷静に見極める必要がある。

中国が台湾に武力侵攻する可能性がゼロとは思わない。ただ大国ロシアがウクライナに侵攻したから中国も台湾に侵攻するというのは短絡的ではなかろうか。歴史的背景、民族構成、政治状況、国際関係も違う。さらに米中の経済関係の密接さもある。2020年からのコロナ禍においても米中の貿易総額は伸びており2022年は6906億ドルで過去最高という。経済的相互依存が武力衝突を避ける効果は大きい。そして中国が台湾に武力侵攻したとして、米国は全面戦争するだろうか。ウクライナ戦争をみても米国、NATO諸国は軍事支援はするが巻き込まれるのは避けている。そもそも第二次大戦以降世界中で最も武力行使、戦争をした米国だが大国と戦争はしない。ウクライナ同様に武器は送るが参戦はしない。武器産業は儲かってても他の業界は避けたいのが戦争だ。

戦後焼け野原の日本が軍事費より科学技術や経済に税金を使ったから世界第二位の経済大国にまでなったと私は考える。最低限の防衛がいまや、他国へのミサイル攻撃も「抑止力」という。「抑止力」の呪縛から解放され、憲法の「国際紛争の解決する手段として武力行使はしない」を再認識する時ではないか。日本が出兵し最初に植民地にしたのが台湾。次は朝鮮。皇后を王宮で殺害し死体を焼き、朝鮮人民を日本の兵士、徴用工、軍の性奴隷としたのだ。日本は朝鮮半島の南北分断の解決、そして中国台湾の武力衝突を回避させる役割を担うのが憲法の望む「国際社会の名誉ある地位」ではないか。

朝鮮民主主義人民共和国のミサイル攻撃。

「抑止力」神話を誘因しているのが朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」）のミサイル発射だ。発射のたびに報道され、各地でアラートが発令される。「北朝鮮」がどうして核弾道ミサイル開発するかと言えば、米国のミサイル攻撃の脅威があるからだ。「北朝鮮」の国防費の総額は韓国の4分の1に過ぎない。国家予算は日本の地方都市相当だ。通常戦争では勝ち目はない。核兵器の脅威「抑止力」がキム政権の国民が飢えても取らざるを得ない基本政策だろう。

「北朝鮮」のミサイルはどこに向いているのだろうか。朝鮮戦争は休戦状態だから韓国と米国で、日本ではない。キム氏が窮鼠猫を噛むと万が一核を含んだミサイル攻撃をしたら、日本で攻撃されるのはまず米軍基地だろう。9.11同時テロを思い出せば、当時米国は日本の米軍基地に最高レベルの警戒を発した。換言すれば米軍基地がなければ「北朝鮮」の脅威は少なくなる。米軍基地が無くならなくても日本が南北朝鮮の融和の橋渡しをできる存在であれば日本は攻撃されないだろう。

タモリさんの今年は「新しい戦前」発言

タモリさんが昨年末のテレビ番組で今年2023年は「新しい戦前」になると言ったことが話題になった。タモリさんは終戦の年1945年の8月生まれ、戦後の日本を見てきた78歳。この言葉をどう受け止めるかは聞いた人の知識、経験、そして想像力の違いによる。そして知識、経験、想像力は未来を担う子どもたちを育てる教員に必要なだとも思う。なぜなら戦時中ほとんどの教員が生徒に天皇のために死ぬと教え、戦後その同じ教員が生徒に教科書に墨を塗らせ、鬼畜米英としたアメリカの民主主義を礼賛したのだ。もっとも多くの日本軍幹部や国家元首天皇まで責任を取らなかったのだから教員に責任を負わせるのは酷な話だろう。しかし、そんな中で自戒反省した教員たちが作ったスローガンが「教え子を再び戦場に送るな」であり、それは彼らの自責と良心の現われだと私は思う。

不戦から戦争準備へあゆみ

- 1954年 自衛隊の発足
- 1976年 三木内閣増加する防衛費を抑制するために「防衛費を国民総生産（GNP）比1%を超えない」と閣議決定。
- 1983年 中曽根首相、訪米した際に日本を「浮沈空母」にすると発言。
- 1991年 湾岸戦争 多国籍軍に当時のレートで1兆8千億円を供出。
自衛隊ペルシャ湾に掃海艇派兵。
- 1992年 PKO法（国連平和維持活動法）成立。1993年カンボジアで文民警察官が殺害される。
その後ルワンダなど危険な地域に延べ12000人以上派兵。
- 2003年 イラク戦争
- 2009年 まで陸塊風軍1080人を派兵。
- 2015年 安倍政権で安保関連法成立
- 2023年 岸田政権 対基地攻撃能力と防衛品倍増。武器輸出解禁を迫及を表明。

平和とは戦争がない状態ではない。生きとし生きる者の命や人権が守られる状態だ。戦争が平和の対局とされるのは、命を国家に差し出し国家が人を殺せと命じる究極の人権侵害を強いるからだ。戦争が始まれば人権を守れなどと平和教育はできない。日の丸・君が代強制、愛国心教育基本法改悪、歴史教科書の度重なる改悪。タモリさんの指摘した戦前は教育現場でもずっと前から始まっていた。教員が知識と経験をそして想像力をもって平和教育をする必要が今こそ求められるのではないか。教え子を戦場に送らないために。（K.K）

足元の戦争遺跡を知る

神奈川県立相模向陽館高等学校 新井 敦子

ウクライナとロシアの戦争の出口が見えない。混迷を極めた現状の解決方法を探るには、過去を知ることが大切なのではないか。こんな思いから、平和運動推進委員会では、慶応大学日吉キャンパス内の旧日本海軍の連合艦隊司令部の地下壕へのフィールドワークを企画した。今回、日吉台地下壕保存の会の喜田美登里さんはじめガイドの方々の協力で、普段はなかなか入れない地下壕に入る機会を得た。

7月22日（土）13時15分に東急線日吉台駅前に集合。駅前のホールでレクチャーを受ける。



ガイドのレクチャーを受ける参加者

太平洋戦争末期、海軍は連合軍の本土上陸に備え、司令部を地下に置いて最後まで戦う覚悟だった。自由な校風の慶応大学も軍国化の流れに抗えず、キャンパスは軍事教練や学徒出陣の壮行会場となる。1944年3月には軍令部第3部（情報部）が第一校舎に入り、7月には退避壕工事が開始。連合艦隊司令部が9月29日に学生の寄宿舎に入り、たちまち大学全体が海軍の軍事施設と化してゆく。地下壕工事がさっそく始まり、完成を待たずに使用されていった。

海軍は明治以来、指揮官が旗艦から指令を出すのが伝統だったが、軍艦が少なくなり、通信の発達もあり、陸上での指揮が検討されるようになった。その結果、司令部は陸上に、さらには地下に置かれるようになっていった。

そこで目を付けられたのが、慶応大学日吉キャンパスだ。霞が関と横須賀軍港の中間という地の利の良さ、無線の受信がしやすい高台にあること、堅固な校舎、地下壕が掘りやすい広いキャンパスなど、海軍にとって好都合だった。こうして連合艦隊司令部は日吉に移り、神風特攻隊や戦艦大和の出撃作戦等が出される発信地となっていった。

今回のフィールドワークの参加者は40名。神奈川や東京の平和大使の高校生達も参加した。

最初の見学地は第一校舎（現高等学校）。最初に軍令部がやってきた場所だ。ここには地球儀のようなカップ型モニュメントがある。その上の壁面のレリーフには、「1934年/2594年」と記されている。1934年は、この学び舎の建設年だ。2594年とは何か？皇紀、いわゆる神武天皇即位の年を元年と定めた年である。こんなところにも、戦前の空気が残されている。

ここで全体説明を受けた後、4つの班に分かれ、班ごとにガイドを受けることになった。



第一校舎前のモニュメント

第一校舎とグラウンドの間の階段を下りて進むと、その奥にアーチ型の地下壕出入り口がある。一步中に入るとひんやりとした空気に包まれる。急な坂になっており、コンクリート床は湿り、滑りやすい。



地下壕出入り口

発電機室などを経てさらに進むと、機械室、そして連合艦隊司令長官室に入る。整備された広めの部屋には、今は何もない。電気のコンセント跡が、昼間のような明るさだったという当時の様子を物語る。長官室の斜め向かいには作戦室、バッテリー室、食糧倉庫、電信室、暗号室と中枢施設が集中している。

約200名の隊員が勤務していたというから、その規模の大きさが推し量られる。司令長官や幕僚らは普段は地上の作戦室で過ごしていたが、空襲時等にこの地下壕に下りた。地上の寄宿舎から地下の長官室までつながる126段の階段も発掘された。この階段を駆け下り、分厚いコンクリに守られた地下30メートルの安全地帯に駆け込んだ彼らは、何を護ろうとしていたのか。地上が空襲にさらされ住民が逃げ惑う中、長官や幕僚達は、沖縄戦や特攻作戦をどんな思いで練っていたのか。



126段の階段前

1945年4月7日、戦艦大和の沈没も、この通信室で受信した。海軍地上部隊の絶望的な戦闘も、かなり正確に掴んでいた。特攻機が艦船に体当たりする瞬間のモールス信号も受信していた。鹿児島県鹿屋基地などから出撃する特攻隊員は、連合艦隊司令部と交信を交わす。レシーバーから「ツーツー ツー」という音が聞こえる。

「これから〇〇を攻撃する」というモールス符号だ。最後にキーを押しっぱなしにして突入する。「ツー」という音が鳴り響いた後、突然途絶える。

その通信音を、私たちはガイドの方からこの場で聞かせてもらった。

「ツーツー ツー」「ツーーーー」そして、鳴りやむ。沈黙が続く。

元通信兵は、この「ツー」という音が今でも耳に残っているという。特攻隊員の思い、元通信兵の思い、それを伝えるガイドの、そしてそれを聞く我々の思いが交差する。



地下壕の中で通信音を聞く



教会前にて

チャペルを出て、寄宿舍に向う。途中、弥生時代の住居址が見え、その奥に葺型の構造物が見える。非常用脱出坑の出口に当たる。今歩いてきた地下壕の上を辿っているわけだ。悠久を感じさせる太古の住居跡と現代の血なまぐさい戦争遺跡とが隣接する、シュールな現場である。寄宿舍はその奥にある



葺型の建造物

床暖房、水洗式トイレ、全面ガラス張りのローマ風呂など羨ましいほど環境に恵まれた寄宿舍は、1944年9月、海軍に接收された。

彼らは緊急時になると126段の階段を下りて地下作戦室に移動し、黙々と軍事作戦を遂行した。まさに海軍の本丸の上に建つ施設がこの場所なのだ。

グラウンド横では、神奈川大会準決勝戦を控えた慶応高校野球部の応援団の掛け声が響いていた。スポーツで競い合う平和な時代を守るためにも、歴史の生き証人でもある戦争遺跡が発信するメッセージを受け継いでいかなければならない。

振り返りの時、高校生平和大使の一人が感想を問われて、こう述べた。「通信室で聞いたツーという通信音が強く印象に残った」と。ツー、と鳴り響いた後、突然絶たれた命。

戦艦大和の沈没を告げる通信音を受信した4月には、この戦争の不毛さ、勝ち目の無さを司令部は認識していたはずだ。それなのに終結させられなかったどころか、天皇を匿う松代大本営の地下壕を作る計画を続行させていた。彼らが護ろうとしていたのは、国民ではなく国体であったと言わざるを得ない。その間どれだけ国民の血が流されたことか。

今なお終結が見えない戦争が世界で繰り広げられている。「ツーー」生身の命のモールス信号が鳴り響いている事態ではないだろうか。

現政権が護ろうとしているのは本当に国民なのか？米国との新たな枠組みのために、国民が「捨て石」となってはいないか？

日吉台地下壕が伝えてくれる歴史から目を背けてはならない。



フィールドワークの参加者

日吉台地下壕フィールドワーク 参加者の感想

神奈川高教組組員 吉田 玉青

"日吉台地下壕に一步足を踏み入れた時に感じたことは、待遇が違いすぎるということだった。

組合の沖縄ツアーに参加させてもらった時、糸数アブチラガマに入ることができ、いつ何時火炎放射器などで攻められるか分からない、電気もない、空気がきちんと流れるようになされていない、衛生面も…というような状況を目の当たりにしていたので、使用目的は異なるかもしれないが、日吉台地下壕の整った造りに驚いてしまった。

位のある人たちは、40cmの厚いコンクリートの壁で守られ、当時では珍しい蛍光灯で明るく照らされた地下壕にすることができる、さらに出入口もコンクリートで作られたもので、この違いはどういうことだと、とても悔しい思いがした。しかし、その地下壕の電信室では、14歳くらいの通信兵が遠方からの「我敵艦二突入ス」を表すモールス信号を受け取り、なんとも言えない気持ちになっていたと聞いた。実際にそれを表すモールス信号の音を聞かせてもらったが、最後の「ピー」と長く続く音は、戦禍にいない私にでさえ、なんとも言えない気持ちにさせた。敵艦に突入する兵士またはそのモールス信号を受け取る少年兵が自分の生徒だとしたら…と考えると、その当時では悲しさで悔しさでただ涙を流すことしかできなかったかもしれない。しかし、沖縄の平和祈念資料館の「展示むすびの言葉」に「戦争をおこすのは たしかに人間です しかし それ以上に 戦争を許さない努力のできるのも 私たち 人間 ではないでしょうか」とあるように、また広島平和記念公園の石碑に「安らかに眠ってください 過ちは繰返ませぬから」とあるように、過去から学んで未来を作っていくことができるのも人間なのだと思う。様々なことを学び、視野を広げ、考え、話し合い、武力や暴力ではない方法で解決策を見つけることのできる人を育てる教育の一助となれるよう、教員としてさらに気持ちを引き締めることのできるフィールドワークだった。"

神奈川高教組組員 矢野 慎一

今回はじめて地下壕を見学しました。企画してくださった平和運動推進委員会と、案内してくださった日吉台地下壕保存の会の皆さまに感謝申し上げます。これまで個人的に戦争遺跡の調査・研究活動に関わってきましたが、神奈川でそうした運動が本格的に取り組まれるようになったのは、1990年代に入ってからでした。なかでも、1996年に刊行された神奈川県歴史教育者協議会編『神奈川県の戦争遺跡』は、大きな画期となりました。その中で、日吉台地下壕と並んで注目されていた戦争遺跡が陸軍登戸研究所です。どちらも、その後40年近くにわたって息の長い活動が続けられ、大きな成果をあげています。戦争体験者から、直接戦争の話を聞くことができなくなった現代、戦争遺跡から戦争を学ぶことがさらに重要になってきていると思います。そのような企画をお願いします。

神奈川高教組シニア 柴田 健

"12年ぶりの日吉台地下壕。参加者は多様な皆さんだった。参加者からは沖縄の壕との違い、日本軍の海軍と陸軍は個別に戦闘していたのか、などが質問された。1941年12月8日の陸軍によるマレー半島・コタバル侵略、海軍によるハワイ真珠湾攻撃は別途に戦ったものという基本認識が浸透していないことが確認できた。

慶應義塾と海軍の関係に小泉信吉（のぶきち）の名がでた。彼は慶應義塾長、横浜正金銀行支配人であり、小泉信三の父である。信三の子が信吉（しんきち）であり、海軍主計大尉で1942年に戦死している。慶應義塾と日本軍との密着を確認したい。"

高校生平和大使・高校生一人署名 宮下 桜

まず私たちの生活の身近なところにこういった地下壕が、戦争の跡が、いまだに残っているということが新鮮とも違いますがなんというか驚きでした。日吉地下壕とその周辺を見学する中で案内をしてくださった方から「今みなさんが歩いているところが先ほど見学した地下壕のちょうど真上です。」というご説明がありました。自分の足元に今でも戦争の足跡が残っていること、自分の踏みしめているこの地で確かに戦争が行われていたことを感じました。この地を、この世界を戦火で包むようなことが2度と起こらないよう私たちが平和を訴え続けなければならないと改めて考えさせられました。また、地下壕を見学している中で特攻兵から地下壕通信室へ実際に送られたモールス信号の音声を聞きました。そのモールス信号は最後にツーツと途切れました。特攻兵として敵地に突撃したのか、あるいは迎撃されたのかはわかりませんが、特攻兵の"最期の声"とも言えるあの信号を聞いた時胸がキュッとなりました。特攻兵はどのような思いで死んでいったのか。通信室で信号を受け取った少年兵たちはどのような気持ちだったのか。そして、彼らの遺した"声"を受け取った私たちはこれからどう行動していくべきなのか。案内をしてくださった方々もおっしゃっていましたが、まずは日吉地下壕見学で見たことや聞いたことを周りに伝えることが大切だと思います。歴史を知り未来に生かしていくことは非常に重要です。歴史を伝え続けていくことが平和への第一歩なのではないか、そう考えさせられた1日でした。

高校生平和大使・高校生一人署名 本田 瑞樹

"今回の地下壕見学で私が特に印象に残ったことは、2つあります。1つ目は地下壕が真っ暗でひんやりとしていたことです。使われていた時には蛍光灯などの光はあったと聞きましたが、それでもあのようなひんやりとしていたところで作業をしていたと考えると先行きの見えない戦争を地下壕が表しているようで感慨深いものを感じました。2つ目はモールス信号についてです。少年達は戦地から最後の届くモールス信号を聞いてどう思ったのか考えると悲しさや不安、苦しい思いを感じたのではないかと思います。

そして、このようなことが実際にあったということに驚きや悲しさを感じました。今を生きる私たちには想像することしか出来ないけれど、伝え、見せていくことが重要だと思いました。"

高校生平和大使・高校生一人署名 浜岡 希実

今回初めて地下壕を見学し、日吉では他国の情報を聞き分け、それを元に作戦を練っていたということを学び、また地下壕や寄宿舎といった建物が現在も存在していることに衝撃を受けました。戦争についてより深く学ぶことが出来ました。

編集後記

海軍の司令部であった日吉台地下壕は、厚い壁に守られて、蛍光灯がついていて、まるで昼間のようだったと聞いた。以前入った沖縄のガンマは、どこも真っ暗で、足場が悪く、たった1時間弱の見学でも息苦しかった。そして、そのガンマからも追い出された沖縄の住民は、銃弾が降り注ぐ中逃げ惑ったと聞いた。戦争では、弱い立場の人の人権が守られないのだと、過去の戦争は教えてくれる。そして今、パレスチナでも、ウクライナでも子どもなど一般市民の命が守られない状態が続いている。私達に今何ができるのか。FWに参加した高校生平和大使の感想を読みつつ、FWを振り返り、教員が平和教育を実践することの大切さを感じる。(H・K)